

先日、園庭で遊んでいた時のことです。おしっこが出たから着替えましょう、と部屋に入りました。

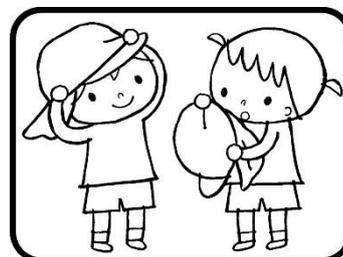
ちょっと着替えだけしてまた出てくるから・・・と靴は靴箱に戻さず並べたまま、帽子・上着は着用したまま、室内へ入ろうとするとじーっと保育士の姿を見ていました。

お部屋に入るから帽子は脱ぐよね？

ジャンパー脱いで掛けるんだよね？

靴は靴箱だよ？

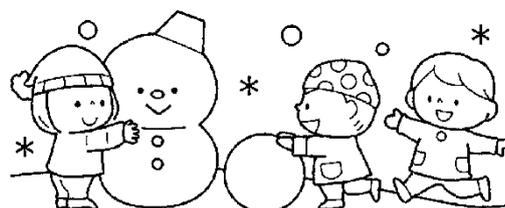
という言葉にならない声が聞こえた気がしました。



あ、そうか、この子はまさに秩序の敏感期の真っただ中に存在しているのだなあ、と感じました。

秩序の敏感期って何でしょう？

敏感期って何でしょう？



敏感期

発育の途中で、ある刺激に対して感受性が特に敏感になる時期。0歳から3歳ごろまでは、「運動」の敏感期。子どもは盛んに身体を動かしたり、手あたり次第に物をつかんだりしがります。そうやって、その後のすべての活動の土台になる、自分の身体を思い通りに動かす能力を獲得していきます。また、この時期は「言葉」や「秩序」の敏感期でもあります。

「いつでも同じ」であることを好みます。

生まれてから2歳半ぐらいまでの時期の子どもは、ものがいつも同じ場所で、同じ状態であること、秩序正しい状態であることを好みます。モンテッソーリは、この時期の秩序へのこだわりを、子どもの「秩序感」と呼びました。

わけもなく泣き出したり、ぐずったりすることありませんか？そんなときの子どもの不機嫌は、子どもなりの秩序感が乱されたためであることが多いものです。大人からしたら「どっちでもいいでしょう」と思うような着替えの順番だったり、服装だったり、実は大事なことです。子どもにとっては、場所や順番がいつも同じであるのはとても重要なこと。周囲の世界に対して、「自分がいる世界は、こういうところ」という秩序づけを試みている最中なのです。その秩序が乱されると、世界がひっくり返ったように感じて、パニックを起こしてしまいます。

いつも同じ場所、同じ順番であれば、子どもは何がどこにあり、次に何が起こるかを予想できます。予想通りであることが、子どもにとっては安心なのです。

この時期の子どもは、秩序にこだわることで、予想する力、物事の法則性を見抜く力をきたえているわけです。子どもの秩序感を尊重し、ものの置き場所やリズムをなるべく一定にして、子どもが安心して過ごせるようにしてあげたいものです。

(自分で考えて生きる力が育つ 12歳までのモンテッソーリ子育て 野村緑著より)

